

わたしが命のパンである

ヨハネによる福音書 6:24-35

（五千人がパンを食べた翌日、その場所に集まった）群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。

『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」

そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

説教

群集の「いつここに来たのですか」という問いに対してイエスはこう答えます。

あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。ヨハネ6:26

ずいぶんと手厳しい言い方をイエスはされます。ただパンが欲しいからわたしの後をつけまわすのだらう、と人々にいいます。イエスはパンの奇跡を一回だけおこない、もうあげないと人々をつきはなしているのでしょうか。イエスは続いてこう説明します。

朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。ヨハネ6:27

それに対して人々はするどくこう訊ねます。

「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」ヨハネ6:28-29

人々はけっしてトンチンカンなことを言っているわけではなく、イエスとの会話は霊的になりたっています。彼らがイエスを追い回していたのはパンがたりずにまた欲しいからではなくイエスのみことばを聞いたかったからイエスを追って船でカファルナウムまで来ました。

きょうはヨハネ福音の6章からみことばを聞いていますが、4章でイエスはこのように言われました。4章では「水」めぐる問答、6章では「パン」をめぐる一連のはなしになっています。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」ヨハネ4:13-14

サマリアの水汲み女とイエスの問答の結論です。こうイエスにつきつけられたサマリアの女はただちに

女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」ヨハネ4:15

このあとイエスと女の問答は続きつつ深まり、ついに彼女はイエスをメシアと理解します。そして彼女の住むサマリアの村全員がイエスを信じたというはなしでした。このサマリアの女のエピソードの合間にそっと滑り込ませているような短いやり取りがイエスと弟子たちとの間にあります。4章は水のはなしのはずだったのにとつぜん食べ物話になります。

弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。ヨハネ4:31-34

これをヒントに「いのちのパン」とはなにかを見てみると、4章のイエスのことばで6章を解説すればこうなります。

朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。ヨハネ6:27

これが6章27節でイエスが説明した内容です。では「食べ物」とはなにかというと4章でイエスはこのように具体的に説明しています。

わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。ヨハネ4:34

お遣わしになった方、すなわち神、み心をおこなうとは神の思いを現実に実行し、そして成し遂げること、それがあなたがたの知らない食べ物つまり「いのちのパン」といっています。

6章ではっきりとしますが、イエスさまの食べ物とわたしたちの食べ物が似ているようで違うことがわかります。

イエスさまの食べ物は神のみ心をおこなうこと（ヨハネ4:34）わたしたちの食べ物はイエスさまを信じること（ヨハネ6:29）と言い切っています。

6章の群集はここまでのイエスのことばを引き出しました。それはイエスのもとに押し寄せた群衆たちの力です。人々が救いを願い求める強い思いです。しかし、群衆の中にはいろいろな思い、それぞれにとっての救いのイメージ、をもつ人がいたことに思い当たります。

パンの奇跡を目の当たりにした人はイエスの力に驚き、おののき、イエスを王と直感してパンのおかわりではなく、イエスを王にかつぎあげようとして押し寄せたのではないか？だとすると、それは利己的な権威主義ではないのか。

また、ほんとうに貧しい人たちは、ただおかわりのパンが欲しくてイエスの元に押し寄せたのではないか？もし、そうではないとすると、どういうつもりでイエスの元に押し寄せたのか。また、イエスのわたしがいのちのパンなのだと言いは彼らにどのように響くのか？

4章ではサマリア人たちはみんなイエスをメシアと信じた、というハッピーエンドになっていましたが、ここ6章のガリラヤ人たちはまだイエスを信じないところがあるようです。さて、イエスはどうするのか、ガリラヤの人たちはイエスにどう反応するのでしょうか。この続きは来週。
